

## ■ 書 評



### 精神科薬物療法グッドプラクティス ワンランク上の処方 をめざして—

日本精神神経学会  
精神科薬物療法研修特別委員会  
編  
新興医学出版社  
2015年6月発行 140頁  
本体価格 3,300円+税

わが国の精神科薬物療法で多くみられている多剤併用処方に対しては、さまざまな方面から問題点が指摘されている。それに対する日本精神神経学会の取り組みとして、精神科薬物療法研修会のeラーニングが開始されたことは会員諸氏もご存じであろう。すでに、この講習を受けられた方もたくさんいるに違いない。本書はこのeラーニングの内容をそれぞれの講師がまとめ、新たに書籍として出版したものである。学会が出版した書籍の書評が同じ学会誌に載るというのは、一種の自己宣伝ではないかという批判はあるかもしれない。そこで、この書評は本書の紹介と理解していただきたい。

さて、eラーニングのよい点は、目の前にインターネットに接続されたコンピュータがあればいつでもどこでも受講できるという点である。しかし、一方でしっかりとメモをとっておかないと、後日のための資料となりにくい。とくに表や図は困る。本書は内容はほぼ講義をなぞりながらも、表や図も多数掲載されているので、eラーニングの復習はもとより、予習として使うこともできるであろう。

本書の全体の構成はeラーニングと同様、2編の総論に続いて向精神薬（抗不安薬、睡眠薬、抗うつ薬、抗精神病薬）についての各論4編が置かれている。研修の目的が多剤併用処方を避けるためのものということもあり、多剤併用のリスク、多剤併用に陥らないための処方の工夫、多剤併用からの脱却法などについて詳しく記載されている。その点で、すでに日常的に薬物療法を行っている精神科医向けの書物である。副題に「ワンランク上の処方を目指して」とあるのは、多少ともベテラン精神科医の自尊心をくすぐるのではないだろうか。

総論は、依存についての薬理学的な説明を主とした第1章と、薬物相互作用についての第2章とからなっている。前者は必ずしも多剤併用の議論に直接つながるものではないが、「依存」「乱用」「中毒」「嗜癖」「離脱」などの正確な薬理学的理解は重要である。薬物相互作用は比較的簡素に書かれている。実際に薬物を複数使用するときには添付文書などを参照して、相互作用を調べることになるので、ここは原理的な事柄だけでよいのであろう。臨床家がかつとも日常的に注意すべき情報が載っているのは、総論に続く各論である。ここでは図表が多用されており、複雑な事柄を視覚的に理解しやすいように工夫されている。レイアウトも上半分が図表で、下半分には文章というスタイルになっている。抗不安薬の第3章と睡眠薬の第4章では、離脱症状の記載が充実している。離脱症状の十分な理解なしには薬物の減量や単剤化はむずかしい。第5章の抗うつ薬では、多剤併用には医学的な根拠の乏しいことと、多剤になった抗うつ薬をどのように減量していくかが具体的に書かれている。第5章の抗精神病薬での減量法はさらに具体的である。減量中に生じる離脱症状を症状の再燃とどう鑑別するか、最初に減量する抗精神病薬をどう決めるか、減量のペースはどのように設定するかなどが表を使って説明されている。

本書は新書版の大きさで、頁数は120あまりである。1日1章ずつ読んでいっても、読み終えるまでに1週間もかからない。自分の処方習慣に多少とも危機意識をもっている精神科医や、多剤併用されている患者さんを前にこれからどう処方を整理していこうかと嘆息している精神科医にまず本書を推薦したい。

最後に本書評の趣旨とは異なるが、書評子の読後感を書かせていただく。本書の発刊やeラーニングにより、わが国の多剤併用はすぐに是正されるのであろうか。書評子は多少とも疑問である。本書はきちんと書かれているのであるが、執筆者は大学教員がほとんどで、悪くいうと上から目線である。多剤併用の悪いところを理論的に指摘するのは容易である。しかし、なぜそのような処方習慣に陥っているか、いうならば「多剤併用をする側の論理」を十分理解できなければお説教に終わってしまいかねない。本書の発行主体である精神科薬物療法研修特別委員会の今後の活動に期待したい。

(仙波純一)